

魔界都市ブルース

長編超伝奇小説

菊地秀行

夜叉姫伝

やしき

NON NOVEL





NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL - 360

魔界都市ブルース やしや きでん 夜叉姫伝 7

平成 3 年 7 月 20 日

初版第 1 刷發行

著 者 きく ち ひで ゆき 菊 地 秀 行

発 行 者 伊 賀 弘 三 良

発 行 所 しょう でん しゃ 祥 伝 社
〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル

☎ 03 (3265) 2081 (営業)

☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印 刷 萩 原 印 刷

製 本 明 泉 堂

万一、落丁・乱丁がありました場合は、おとりかえます。Printed in Japan.

ISBN4-396-20360-8 C0293

©Hideyuki Kikuchi, 1991

スーパー
小説 超伝奇編
魔界都市ブルース

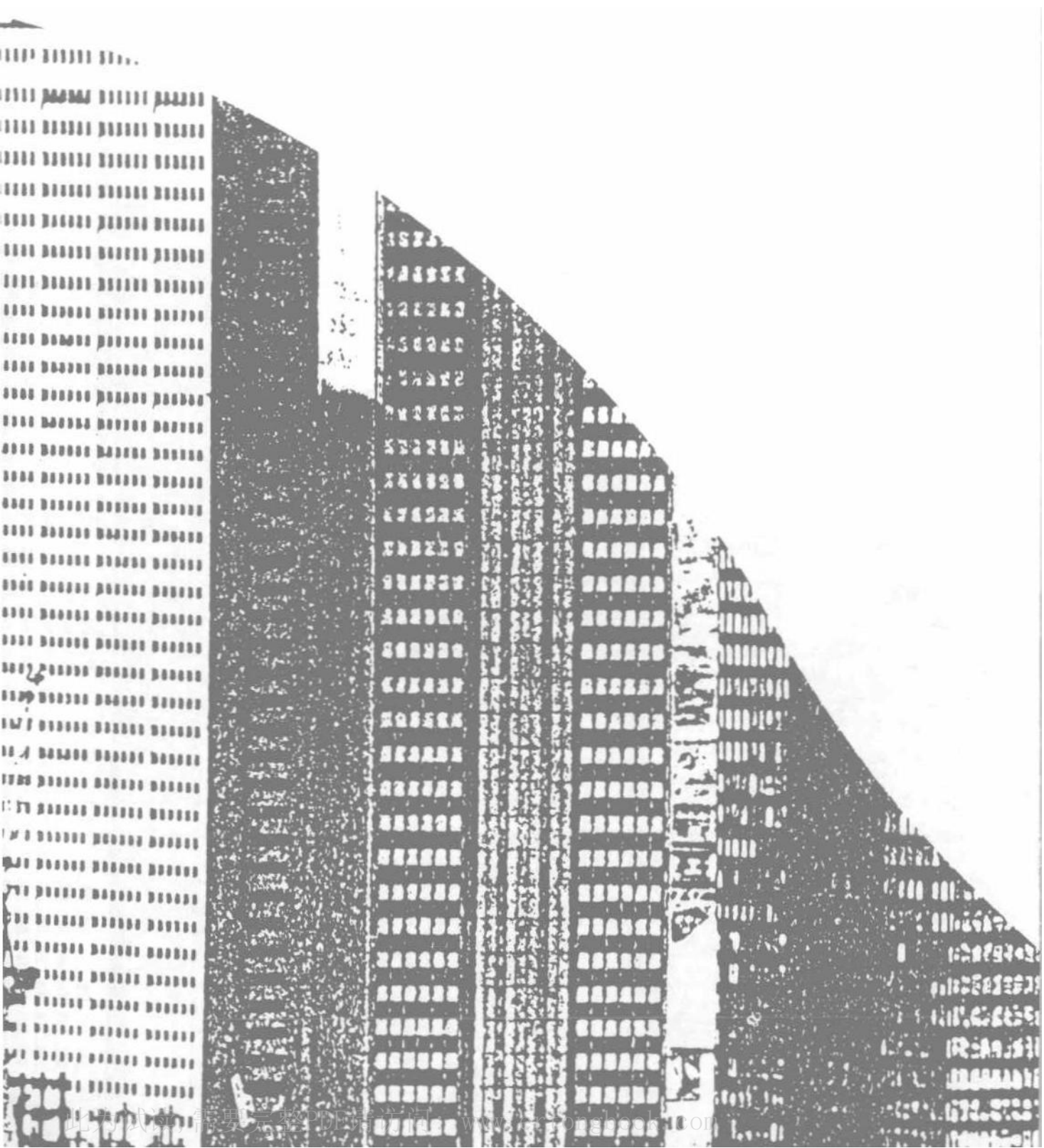
夜叉姫伝7
菊地秀行



NON NOVEL

祥伝社

目次



1章 鬼ごっこ

9

2章 火華大輪ひかたいりん

37

3章 仮面跳鬼ちようき

65

4章 雷火黙示録

99

5章 居所魔転きよしよ

123

6章 操戯師たち

149

7章 遍歴包み

175

8章 陰謀魔団

205

あとがき

228

カバー&本文イラスト・末弥純
カバー構成・EE 大林真理子

〈物語に登場する主な人物〉

秋 せつら……………〈魔界都市〉で、せんべい屋兼人捜しセンターを営む美麗の魔人。千

分の一ミクロンの妖糸を操る。

メフィスト……………死人をも甦らせる、恐るべき美貌の魔界医師。

美 姫……………安住の地を求め、四千年の時空をさまよう中国の吸血美姫。

鬼 翁……………姫に仕え、〈新宿〉制覇の野望を抱く奇怪な老妖術師。

劉 貴……………妖琴「静夜」を爪弾き、姫に従う吸血鬼。魔気功を駆使する。

秀 蘭……………姫に付き従い吸血人形を操る妖女。劉貴に想いを寄せていたが、人形娘

に斃される。

華南 高子……………中国古代史専攻の女子大生。夏の姫妃に憑かれ、事件に巻き込まれる。

夜 香……………〈魔界都市〉の戸山住宅を棲家とする吸血鬼で、姫に斃された「長老」

の孫。

トレンブルク……………でぶの魔道士。〈魔界都市〉の魔法街に住んでいたチェコの魔道士が

レイン・ヌーレンブルクの妹。

人形娘……………大鴉と共に、ヌーレンブルクに仕え、魔力を駆使する。

梶原 義丈……………異常事態収拾に奔走する〈魔界都市・新宿〉の区長。

『夜叉姫伝1〜6』のあらすじ

〈新宿〉制覇の野望を抱く四人の吸血鬼群が、四千年の時空を超え、〈魔界都市〉に出現した。姫、騏鬼翁、劉貴、秀蘭の四人である。戸山住宅の吸血鬼一族の「長老」、そしてガレイン・ヌーレンブルクは「姫」との死闘の末、斃された。さらに、夜香は「姫」の下僕と成り下がり、メフィストは自ら吸血鬼の仲間となっていた。彼らの陰謀阻止の切札せつらは、秀蘭の毒牙を受けるが、秀蘭は人形娘によって斃され、せつらは人形娘の看護で回復した。だが、せつらの息の根を止めるべく、「姫」は新たに不死身のベイ將軍を繰り出し、〈新宿〉吸血鬼化の事態を重く見た日本政府は、陸自特務班を投入、三つ巴の魔戦へと発展した。せつらは、「姫」の毒牙にかかり吸血鬼と化した高子を救うべく、敵の本拠地へ乗り込むが、現実と虚無が交錯する悪夢に捉われ、迷宮をさまよいつつながら、反撃を試みていた。

一方、吸血鬼群では結束に亀裂が生じていた。「姫」はせつらを下僕とすることのみに執着し、劉貴はその許を去った。騏鬼翁は〈新宿〉支配のため独自の謀略を進め、ベイ將軍は高子をわが物にすることに執着していた。そのベイ將軍は、本拠地を脱出したせつらとの深夜バスを血に染める死闘の末、斃された。

だが、政府は核による〈新宿〉殲滅作戦を画策し、七時間後に迫っていた。しかし皮肉なことに、〈新宿〉を救えるのは「姫」の妖術の虜となった金剛台総理のみであった。

ここに、妖魔蠢く闇世界で、総理を保護するという「姫」の提示したゲームに挑むべく、せつらは再び妖異の世界に足を踏み入れたのだった……。

1章

鬼ごっこ

妖姫は忍び笑いで宣言を終えた。

「何を言うか？」

「何者だ、貴様!?」

ボディガードたちの右手で、携帯機関銃がきらめいた。

二五センチ足らずの全長ながら、口径三ミリ、徹甲弾を一弾倉七〇発——三・五秒で叩き込む猛射は、至近距離では死神そのものだ。安全装置はすでに外されていた。

「よせ！」

金剛台総理の制止を、ガードたちは愕然と聞いた。

「撃ってはならん。この方は、私の——恩人だ」

「うまいことを言うなあ」

せつらがのんびりと賞めたので、ガードたちはさ

らに混乱した。

「しかし——総理」

「いかんと言ったら、いかん！ 武器をしまいたまえ！」

銃口は持ち主の意志を示して、せわしく上下した。

「ついて来い」

妖姫が背を向けた。

霧の彼方へ歩み去る幻のような影へ、せつらと高子がつづき、金剛台総理も、また。

ガードが駆け寄り、その腕を両側から捉えた。どちらも、格闘技のプロである。身長は一九〇センチ、体重は八〇キロを超す。

麻薬で凶暴化した二〇〇キロのプロレスラーでさえ、片手で取り押さえられる男たちであった。

それが——眼を剝いた。

引きずられているのだ。

頭ひとつ半も小柄な総理の足取りは、何の遅滞も

なく、むしろ悠々と先行の美影を追って行く。

いくら力を込め、耳元で停止を要請しても、総理の前進は止まらなかった。

残る二人が前と後ろに廻った。

ひとりが太鼓腹を押し止め、ひとりは腰から両脚へすがりつく。

渾身の力を込めたアーム・ロックは、あっさりと蹴り外された。

金剛台の歩みは止まらない。虚ろな眼差しを注ぐ瞳に、恥も外聞もない愛執の炎が燃えているのに、ガードたちは気づかない。

「止まらんぞ」

「総理——辞表は後ほど！」

前に廻った男が跳びすざりざま、凄まじいボディブローを脂肪袋へ叩き込んだ。

手首までめり込む。息を吸い込んだところを狙うプロのタイミングに狂いはない。

総理は呻き声ひとつ立てずに歩きつづける。

「もう、いかん。——足を撃て！」

左脇のひとりが叫んだ。妖姫とせつらたちの姿はもう白霧に溶けている。

「よせ！ 相手は総理だぞ！」

そう叫ぶ前の男を無視して、アーム・ロックに失敗したガードが起き上がりざま、携機を、やや下方にポイントした。

三人が跳びすさった刹那、小さな銃口が炎の羽根を広げた。

劣化ウラン弾芯の徹甲弾を食らった膝下の肉が弾け、布片と鮮血が飛んだ。

針のような薬莢の落ちる金属音が、ひどく生々しく耳に届く。

茫然と見つめる男たちの前を、血まみれの脚が、何の異常もなく歩いて行く。

小柄な身体が淡い影法師と化そうとする頃、ガードたちものろのろと後を追いはじめる。

見えない糸に操られるマリオネットのごときその

足取り。

霧が色を失った。

せつらは陽光の下にいた。妖姫の国に入ったのだ。

眼を細めもせず、せつらは周囲を見廻した。

妖姫と高子^{たかこ}が前方にいる。

その向こうに、平べったい建物の列がつづいていた。

ひどく古ぼけ、色褪^あせた土壁の家々であった。屋根や壁に這^はう亀裂^{きれつ}や大小の穴を見るまでもなく、廃墟と知れた。

遠い時代の中国の邑^{むら}でもあったろうか。

せつらの髪が揺れた。風がある。

「金剛台と用心棒どもは、すでに邑^{ゆう}のどこかにいる。あと七時間——見事に探^{さが}し出してみせよ」

妖姫が薄笑いを含んでこう言っても、麗貌は廃墟の色に向けられている。

夜が凝集^{ぎようしゅう}したかのような黒づくめの姿は、都会の闇こそふさわしいと見えるのに、光溢^{あふ}れる野辺^{のべ}に置いて、風と稻妻が刻^{きざ}んだ美しい彫像のように映えた。

しばし、妖姫すら見惚れた。

「何だい、ここは？」

四方の山塊とひと筋の川の流れを確かめてから、せつらは訊^きいてみた。

「夏^かよりも古い時代の人間が棲^すんでいた村の跡じゃ。今では住人もおらんが、代わりに、おかしな奴らが棲息しておる。奴らの餌食^{えじき}になる前に、早う、総理とやらを見つけ出せ。——私は、あそこの松の根元におる。そこへおまえがやって来たとき、この遊びは終了じゃ。新宿が救いたければ、知り合いの生命が大事とあれば、あと七時間——長い時間ではないぞ」

珠^{たま}でも吐きそうな唇が、じわり、と残忍に曲がって、

「しかし、ここにおれば、おまえも高子とやらも安心じゃ。——つまりぬ救助活動はよしにして、私の下僕となれ。そうすれば——」

「じゃあ、行くか」

せつらはひとつ背伸びをして言った。

妖姫のこめかみに浮いた青い血の筋も知らぬげにのうのと、

「華南さんを頼むわ」

「ならぬ。——連れて行け」

「足手まといだよ」

「ならば、なおのことじゃ。片時もそばに置いて離さぬほうがよいぞ。柔らかな女の匂いを、村の住人どもは、とうに嗅ぎつけておるわ」

せつらも感じていた。

今の今まで、虚無の気配のみが支配していた廃墟のあちこちで、危険な気が蠢き騒ぐのを。

彼ひとりなら何とかなるかもしれない。しかし、半ば吸血鬼と化し、その血を求める高子が一緒に

は、原住民の敵意をさばきつつ、金剛台総理を拉致できるかどうか。

「どうしても、預かるのはいやかい？」

「早う、行け」

「ケチ女」

妖姫は眼を剥いた。初めて耳にする悪口に驚いたのである。中国四千年——どころか、その遙か以前の名も知れぬ王朝の栄枯盛衰を目の当たりにしてきた妖姫だ。当然、その人民から、落ちこぼれはあるまいと思われるほどの罵倒を叩きつけられている。

だが、これはない。これだけはなかった。まさか

——ケチ、とは。

呆気にとられ、すぐ、その意味に気づくや、桃の花みtainな白い美貌に、怒りの朱がさした。

八つ裂きにしても飽き足らぬ男と思ったであろう。

だが、当人は、言うだけ言ったら知らないよ、とばかり、華南高子を従えて、悠々と廃村への道を

辿^{たど}って行く。

どう見ても、世界の破滅を憂える男の足取りではなかった。

「戻^{もど}って来るのだぞ、秋^{あき}せつら」

妖姫の唇は声もなく、こう動いた。

「おまえは生き残らねばならぬ。〈魔界都市〉とやらのために必死で戦い、何もかも失って戻れ。断じて正午までに、総理を手には入れさせぬぞ。おまえに与えられるのは、果てしなく深い絶望の闇のみだ。それに膝を屈したとき、おまえは最後の救いを求めて私のもとへやって来る」

そして、妖姫は高らかに笑った。風が吹いた。荒い砂粒を含んだ風であった。妖姫の声に触れると、砂塵^{さじん}は雨のように地上を打った。

声に怯^{おそ}えて逃げたかと思われた。

村を囲む土塁の前で、せつらは足を止めた。

高さ一メートル、厚さは約三〇センチ。土をこ

ね、漆喰^{しつくい}で塗り固めたものだ。見る影もなく崩れかけてはいるが、建設当時は自慢の防備だったに違いない。

樫^{かし}らしい丸木の木柱だけがそびえる門をくぐって、せつらは村へ入った。足元を黄色い砂塵が、奇怪な動物のように走りすぎた。

「人捜しなら得意技」

せつらはつぶやいて、妖糸を放った。

芸術というものを真に理解する彫刻家なら、われを忘れて口づけしたくなるような繊指^{せんし}——白い臍影^{おぼろかげ}を思わす拳^{こぶし}の中で、ひとたびそれが身じろぎすれば、あり得ぬ太さのチタンの糸は、刃^{やいば}となり、錐^{きり}と化し、眼に耳に、そして、無限長の指となる。

吹く風にもその姿は見せず、陽光の中を、時折虹^{にじ}色のきらめきが人気^{ひとけ}もない通りと家々を渡って行った。

天地^{てんち}の何処^{いずこ}に潜^{ひそ}もうと、その美しい探索から逃れる術^{すべ}はないと知るものはいない。

鋭利な痛みが指先に伝わった。

一瞬のうちに、せつらは掌中の妖糸を捨て、別の糸に替えた。

それは送り出さずに、指先を見つめた。

紅い球がぽつんと浮いている。この若者の身体に咲けば、血ですら花の蕾であった。

「掴んだにせよ、噛みついたにせよ、僕の糸に斬られず引いたか。——はて、あの女、あいつにも入れないおかしい物が溢れる国だと言っていたが、どうやら、本当らしい」

せつらは素早く指を唇へ持っていく、寸前で止めた。珍しく、いやそうな表情で血の珠を眺め、左手でハンカチを取り出して拭いた。

「ちようだい」

喘ぐような声がした。

せつらは振り向き、哀しげな表情になった。

ブラウスとジーンズ姿の高子が白い陽射しを浴びていた。

蠟細工のような肌に、唇だけが紅い。

「はあふ」

と、息を吐いた。

上唇が自然にめくれ上がり、白い歯と歯茎が剥き出しになった。異様に長い乱杭歯を押し分けるようにして舌がのぞいた。

「ちようだい」

せつらの胸元へわななく右手が伸びた。

「ちようだい。その指先を。なんて、いい香り」

「悪いが、お預けだ」

そうせつらが言った途端、高子の手は縛りつけられたみたいにもとの位置へ戻った。

眼には見えぬ一条の鋼の糸が、時にはゆるやかに、時には固く高子の身を呪縛しているのだ。でなければ、今の血に飢えた高子を、到底、連れて歩けるものではない。

「ちようだい、ちようだい」

飢えと渇きに卑しく歯を噛み鳴らしながら、高子